

## 現代日本語における奪格の意味記述

### A semantic description of the ablative case in Japanese

菅井 三実\*  
SUGAI Kazumi

The present paper is devoted to characterizing the ablative case marker *-kara* in Japanese, describing its individual meanings (semantic roles) from the semantic point of view. The first section illustrates that the ablative case is characterized on the basis of the SOURCE-GOAL schema or the SOURCE-TERMINAL schema, and thereon in the second section the ablative case is analyzed as having six-fold meanings (semantic roles), profiling an inchoative phase in the event that is predicated by the predicative. The third section shows that the ablative NP is somewhat remote, in space, in time, and in condition, from either the nominative NP in the intransitive structure or the accusative NP in the transitive structure. In the last section, it is clarified that the SOURCE-TERMINAL schema can be tolerated to pertain to "the first of sequence" as a peripheral meaning.

キーワード：奪格, カラ, スキーマ, 遠隔性, 日本語

Key words: ablative, kara, case, schema, remoteness, Japanese

#### 0. はじめに

本稿の目的は、現代日本語の奪格(カラ格)を包括的に考察し、個別の意味用法を整理しながら、固有の意味特性を明らかにするとともに、奪格の全体像を明らかにすることにある。まず第1節で奪格(カラ格)の基本的な特性をスキーマの観点から規定した上で、第2節で、個別の意味用法を特徴づける。第3節で、主格や対格との2項的な関係において奪格が固有の意味として<遠隔性>をもつことを示し、第4節では、やや周辺的な用法を取り上げ、スキーマの変容という観点から統一的な説明を与えたい。

#### 1. 奪格のスキーマ的規定

第1節では、カラ格の基本的な特性をスキーマという観点から規定する。

奪格(カラ格)の用法は、いくつかの意味を設定するかにおいてさえ先行研究によって様ではない。実際、城田(1993)の5分類や井佐原ほか(1989)の8分類は、相互に比較すれば、それぞれにカバーできていないものを見つけるのは容易であり、最も多くの14という用法を列挙している国立国語研究所(1997:187-195)は、分類の基準が明確でない上、同著が自ら認めているように、整理を要することは明らかである。いずれも、網羅的な記述と一貫した意味規定をなしていない点で、理論として不十分であることは明らかである。本稿は、自動詞構造の主格または他動詞構造の対格との2項的な関係という観点

から、次の7つを設定する。

- (1) a. 学校から自宅に帰る。 [位置変化の起点]
- b. 太郎が大学教員から政治家に転身する。 [状態変化の起点]
- c. 犯人は後ろから女性を襲った。 [エネルギー伝達の起点]
- d. 現場近くから遺留品が発見された。 [発生の起点]
- e. 職員の不注意から重大事故が発生した。 [因果関係の起点]
- f. 今日は朝から雨だった。 [時間軸上の起点]
- g. 古い組織は内部から崩壊する。 [順序の起点]

(1)の分類は、基本的に、奪格(カラ格)と主格や対格との意味関係に基づいたものであるが、個々の性質は第2節で個別に詳説したい。あらかじめコメントしておくものとして、(1b)には、いわゆる[材料]ないし[原料]の奪格が含まれ、(1d)の[因果関係の起点]は、一般に意味役割として用いられる[理由]ないし[原因]に相当する。(1g)については、第4節で詳説したい。<sup>[1]</sup>

さて、格というものを分析する際、方法論的に重要なのは、形態格を個別に分析することと並行して、体系的な観点から相対的に規定するというアプローチであり、カラ格については、菅井(2005)において、ヲ格やニ格との関係概念として、次のように特徴づけた。

\*兵庫教育大学(社会・言語教育学系)

(2) 《起点》 → 《過程》 → 《着点》  
 カラ ヲ ニ

(2)の図式は、Johnson(1987)の《起点-経路-着点スキーマ(SOURCE-PATH-GOAL SCHEMA)》を簡略化したもので、格との対応は《起点》と《着点》が、それぞれカラ格とニ格で実現される。ここで重要なのは、菅井(2005)で詳説したように、格は、空間的・時間的に分節するという機能を持つ点である。上の(1a)で言えば、「帰る」という事象において「学校」は《はじまりの局面》をプロファイルし、(1b)でも、「大学教員」は「転身する」という事象において、やはり《はじまりの局面》をプロファイルしているというのが本理論の分析である。<sup>[2]</sup>

ただ、《起点》をカラ格が標示するとき、その対極が《着点》としてニ格で標示されるケースのほかに、《終点》としてマデ格で標示されることもあることから、次のようなスキーマも用意する必要がある。

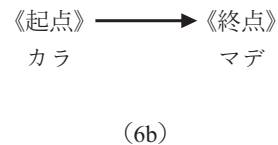
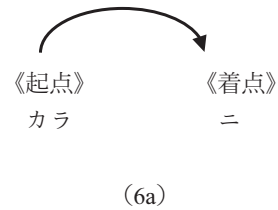
(3) 《起点》 → 《過程》 → 《終点》  
 カラ ヲ マデ

上掲の(2)のように対極が着点としてニ格で標示されるとき、(3)のように対極が終点としてマデで標示されるときで、カラ格の機能に変わりはないものの、当然、全体としての意味には差異が認められる。つまり、(2)のように対極が着点としてニ格で標示されるときは、起点と着点に挟まれた途中の部分は背景化され、2つの点(起点と着点)だけが前景化されるのに対し、(3)のようにマデ格で標示したときは起点と終点の間を含んだ道程が前景化される。具体的には、次のような現象に反映される。

- (4) a. 太郎が東京から大阪に転居した。  
 b. ?? 太郎が東京から大阪まで転居した。
- (5) a. ?? 東京から大阪に車で走り続けた。  
 b. 東京から大阪まで車で走り続けた。

(4)のような動詞「転居する」という瞬間的な事象では、転居前の地点と転居後の地点の間を前景化することがないため、起点と着点という2つの点を前景化するニ格で標示され、マデ格で標示することは出来ない。これに対し、(5)のような動詞「走り続ける」は、継続性のある事象であり、移動の範囲に「東京」と「大阪」の間を含んだ道程全体を前景化するため、ニ格ではなく、マデ格で標示されなければならない。

このことは、視覚的に次のように図示できる。

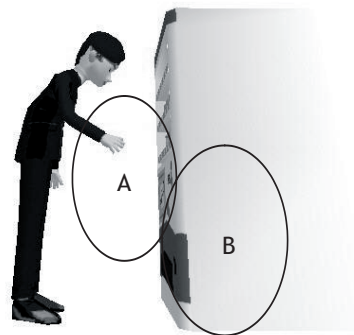


(6a)のような“点から点へジャンプするような移動”と(6b)のような“道のりをたどるような移動”の差異は、カラ格(起点)の対極にあたるニ格(着点)とマデ格(終点)の違いに帰着され、カラ格そのものには本質的に違いはない。かくて、カラ格は、(1)に挙げたような7つの下位分類をもつものの、(2)または(3)のスキーマによって統一的に記述できることになる。

ここで1つ補足的に取り上げておく現象は、次のように、表面的に[起点]と[着点]が交替するように見えるケースである。

- (7) a. この投入口に硬貨を入れて下さい。  
 b. この投入口から硬貨を入れて下さい。

例えば、自動販売機に硬貨を投入するとき、使用者の視点から自動販売機を見ると、(7a)のような表現が普通であるが、同じ状況を描写するのに(7b)も許される。このとき、決して(7a)と(7b)が知的意味において等しいということではなく、次の図が示すようにスコープ(領域)の差異を反映したものと分析できる。



この図において、楕円Aのスコープ(領域)をベースとすると、「投入口」は「硬貨」の[着点]としてニ格で標示されるが、楕円Bのスコープ(領域)をベースとすれば(7b)

のように「投入口」を機械にとつての[起点]として解釈することが可能になる。つまり、(7)のペアは、皮相的にニ格とカラ格が交替しているように見えるけれども、ニ格が起点を表すわけでも、カラ格が着点を表すわけでもない。国立国語研究所(1997)では、「戸口から入る」や「西岸から上陸する」のような用法を[場所の経過]と呼び、森田(1989:344-345)は[経路]と呼んでいるが、奪格に意味役割として[経路]を認めるべきではないというのが本稿の分析である。

なお、冒頭の(1)に挙げたカラ格の6分類を、国立国語研究所(1997)の14分類および城田(1993)の5分類と対照させると、下記のように整理できる。

本稿の用語	国立国語研究所(1997)の用語	城田(1993)の用語
位置変化の起点	相手 場所 移動の始点 場所の経過 比較の基準	空間的起点 起点としての相手 起点としての動作
状態変化の起点	始状態	非空間的起点
発生の起点	範囲規定	空間的起点
エネルギー伝達の起点	動作主 与え手 観点	非空間的起点 非直接補語表示
因果関係の起点	原因・理由	
時間軸上の起点	時 時の始点	

一番右の列には、城田(1993)の分類として7つの意味があるように見えるが、「空間の起点」が[位置変化の起点]と[発生の起点]にまたがり、「非空間の起点」が[状態変化の起点]と[エネルギー伝達の起点]にまたがるためであり、城田(1993)が挙げた意味の数は5である。また、朴(1996)は、形容詞が述語になるケースに限定した上で、①基点としての基準(空間量および時間)、②比較の基準、③出所の基準の3つを設定しているが、①基点としての基準のうち、空間に関する用法は[位置変化の起点]に吸収され、時間的な用法は[時間の起点]に吸収されるほか、②比較の基準と③出所の基準は、ともに[位置変化の起点]に吸収される。

以上、本節では、カラ格を相対的に規定する2種類のスキーマを挙げ、いずれのスキーマでも、[起点]として規定できることを確認した。

## 2. 奪格の意味的多様性

第2節では、第1節の(1)に挙げた7つの意味のうち、(1a)~(1f)に挙げた6つの意味を個別に規定する。先行研究のうち、城田(1993)の5分類が動詞の分類に対応させているに過ぎなかったのに対し、本稿の分類は、自動

詞構造の主格または他動詞構造の対格との2項的な関係に基づいたものである。以下において、述語が表す事象においてカラ格が《はじまりの局面》をプロファイルすることを確認しながら、個別の意味を特徴づけていきたい。<sup>[3]</sup>

まず、第1の[位置変化の起点]というのは、空間であれ非空間であれ、述語が表す事象において、その前後で位置に差異が生じるもので、カラ格は、その《はじまりの局面》をプロファイルする。具体的には、第1節で挙げた(1a)や(4)のような空間的な位置変化のほか、次の(8)のようなものがある。

- (8) a. 花子の気持ちが太郎から離れていった。  
 b. 県から各市町村に財源を移譲する。  
 c. 糸魚川から富士まで大地溝帯が走っている。  
 d. 太郎が銀行から資金を借りました。

(8a)と(8b)は、非空間次元において抽象的な意味で位置変化が認められる例である。(8a)のような自動詞構造では、奪格(カラ格)の「太郎」は《はじまりの局面》において主格(ガ格)の「花子の気持ち」が位置づけられていたところであり、(8b)のような他動詞構造では、奪格(カラ格)の「県」は《はじまりの局面》において対格(ヲ格)の「財源」が位置づけられていたところと特徴づけられる。(8c)では述語に移動動詞「走る」が使われているものの、「大地溝帯」は地層であるから、新潟県糸魚川市と静岡県富士市の間に静的に存在するものであって、位置変化を被ることはない。このような表現は、Langacker(1986, 1987)においてabstract motionと呼ばれたもので、主語NPが位置的に変化することはないものの、話者の視線が仮想的に移動するものと分析されている。この場合のカラ格は、視線が《はじまりの局面》で置かれる位置であり、この点において、(8a)や(8b)と同じ原理で扱うことが可能になる。(8d)は、城田(1993)で<相手としての起点>と呼ばれたものであるが、主格NPまたは対格NPとの関係で特徴づけるという観点から言えば、[位置変化の起点]でよいことになる。

2つ目の[状態変化の起点]は、述語が表す事象において、その前後で状態に差異が生じるものをいい、カラ格は、その状態変化において《はじまりの局面》をプロファイルするというのが本稿の分析である。具体的には、次のように例示される。

- (9) a. 画像ファイルをMPEGからAVIに加工する。  
 b. 太郎が疲労から回復した。  
 c. 丸太から小船を作る。  
 d. 木の枝が真ん中から折れた。  
 e. 報告書は5つの章からなる

(9a)の場合、奪格NP「MPEG」は、動詞「加工する」という事象における「ファイル」の初期状態であり、(9b)の奪格NP「疲労」は「太郎」の初期状態にはかならない。(9c)の「丸太」は「作る」という事象における《はじまりの局面》にはかならない。(9c)の「丸太」は、一般に[材料]ないし[原料]と呼ばれるが、本理論において[状態変化の起点]は[材料]を含む概念ということになる。(9d)は、国立国語研究所(1997)で[場所]と分析しているものであるが、本稿の理論によれば[状態変化の起点]と分析される。というのも、「折れる」という事象の《はじまりの局面》において「真ん中」だった部分が、「折れる」という事象の結果、「真ん中」ではない状態になるからである。(9e)は、述語に「なる」という状態変化動詞が用いられているにもかかわらず、実質的に奪格NPが状態変化を被ることはない。この用法においても、状態変化という語彙的な意味が希薄化して、認知プロセスだけが残り、<材料>と<結果>という関係だけが表されているものと分析できる。(8c)の奪格が主体化によって<位置変化の起点>から派生した用法であるのと同様に、(9e)の奪格も、主体化によって<状態変化の起点>から派生した用法に過ぎず、したがって、本稿では<状態変化の起点>と分析しておきたい。

第3の[エネルギー伝達の起点]は、下の(10)で例示されるようなものであるが、この意味でのカラ格は、主格(ガ格)や対格(ヲ格)が位置変化を起こす前の場所でもなく、状態変化を起こす前の初期状態でもない。位置変化を起こす前の場所でないという点で、[位置変化の起点]と異なり、状態変化を起こす前の初期状態でないという点で、[状態変化の起点]と異なる。むしろ、はじめから奪格NPが主格NPや対格NPと遊離している点に特徴がある。

- (10) a. 被害者は犯人に背後から頭を殴られた。  
 b. TVモニターが天井から吊るされている。  
 c. 花子は指導教官から論文を批判された。  
 d. 私どもの方から金銭を要求したことはない。

(10a)の「頭を殴られる」という事象において、奪格NPの「背後」は初期の位置や状態ではなく、その事象の事後で、別の位置や状態に変化するわけではない。ここでの「背後」は、「被害者」ないし「頭」と「犯人」の位置関係を表しているが、単なる空間的な位置関係を表すと言うだけでなく、「犯人」の力が加えられる位置であり、その点でエネルギー伝達の起点として特徴づけられるというのが本稿の分析である。(10b)も同様で、「TVモニター」は、はじめから「店の天井」と離れたところに位置づけられるが、単に、離れたところに位置づけられるというだけで「TVモニター」と「天井」が同じ節

の中に生起するわけではない。「TVモニター」と「天井」が有機的に関係しているからこそ、同じ節の中に生起するのであって、「吊るされる」という事象において、「天井」は「TVモニター」を支えるエネルギー伝達の起点と分析できる。また、(10c)のように、奪格で標示される名詞句が人間であるとき、[動作者相当句]として特別の扱いを受けることがあるが、いわゆる[動作者相当句]は、[エネルギー伝達の起点]の一種であって、本稿では、カラ格に[動作者相当句]を設定する必要がないことになる。(10d)は、城田(1993)で「非直接補語表示」などと呼称され、特別扱いされているものであるが、本稿の分類によれば、(10a)～(10c)と同じように[エネルギー伝達の起点]として扱われることになる。<sup>[4]</sup>

第4の[発生の起点]は、《はじまりの局面》において主格や対格が位置する場所でありながら、主格あるいは対格に状態変化が認められる点に特徴があり、この点で、位置変化と状態変化の混合のような性格を持つ。具体的には、次のように例示される。

- (11) a. 捜査員がトランクから毛髪を発見した。  
 b. 客席から大きな拍手が起こった。  
 c. 応募者の中から公認候補を選抜する。  
 d. 太郎が東京1区比例区から選挙に立候補した。

(11a)のような他動詞構造において、対格NP「毛髪」は「発見する」という事象の《はじまりの局面》において「トランク」の中に位置しており、この点では[位置変化の起点]と同じであるが、「髪の毛」に生じるのは位置変化ではなく、「発見する」という事象によって視覚的に発生するものと解釈されるというのが本稿の分析である。(11b)のような自動詞構造において、奪格NP「客席」は、「起こる」という事象の《はじまりの局面》における主格NP「拍手」の位置を表し、この点では[位置変化の起点]のケースと同じであるが、「拍手」は「起こる」という事象によって聴覚的に発生するものであり、この点で状態変化が認められる。(11c)では、「選抜する」という事象の《はじまりの局面》において対格NP「公認候補」が「応募者の中」にいるという点では、[位置変化の起点]と同じであるが、位置的に変化を生じるわけではなく、「公認候補」という状態が発生する点で、[状態変化]が認められる。(11d)でも、《はじまりの局面》において「東京1区」に位置しながら、「立候補する」という事象によって「候補者」という状態が発生する。(11)で挙げた例では、いずれも、位置変化と状態変化の両方の性質を有しており、これが[発生の起点]を特徴づけるポイントになる。

5番目の[因果関係の起点]は、従来の用語法でいう[原因]ないし[理由]に相当するが、本稿では、他の意味



との用語法上の整合性という観点から、[因果関係の起点]と呼ぶことにする。

- (12) a. 経済政策の失敗から内閣が総辞職に追い込まれた。  
 b. キャンプ場の焚き火から大きな山火が発生した。

(12a)において、奪格の「経済政策の失敗」が、結果的に「内閣が総辞職に追い込まれた」という事象に至るという点で、奪格NPは《はじまりの局面》をプロファイルしていることになるが、奪格の「経済政策の失敗」は「内閣が総辞職に追い込まれた」という事象の一部ではなく、むしろ、時間的なラグ(時間差)があることから、奪格の「経済政策の失敗」が《はじまりの局面》をプロファイルすると解釈するには、スコープを広げて、「経済政策の失敗」と「内閣が総辞職に追い込まれた」という事象を有機的に関連した一続きの事象として把握することが前提条件になる。同様に、(12b)では、奪格の「キャンプ場の焚き火」が、結果的に「大きな山火」に至るという点で、奪格NPは《はじまりの局面》をプロファイルしていることになるが、当然のことながら、「キャンプ場の焚き火」と「大きな山火が発生」することが、有機的に関連した一続きの事象として把握されなければ、奪格NPの「キャンプ場の焚き火」が[因果関係の起点]と解釈されることはない。このように、時間的に離れている2つの事柄が有機的に関連した一続きの事象として把握されるとき、先行する事象が[因果関係の起点]として奪格で標示されるということになる。

6番目の[時間軸上の起点]は、比較的分かりやすく、次のように例示される。

- (13) a. 午後の首脳会談は1時から始まった。  
 b. 次郎は端から勉強する気がなかった。

空間的な意味をもつ形式が時間的な意味に比喩的拡張(metaphorical extension)を起こすことは周知の通りであり、(13a)のような典型的な用法のほかに、(13b)のようなものが観察されることを確認しておきたい。<sup>[5]</sup>

ここまでの記述に関して重要なのは、本稿も都合7つの意味を設定したものの、分類は便宜上のものであって、解釈のレベルでは曖昧になるケースも認められる。

- (14) a. 10年前の両親の離婚から太郎の人生が変わった。  
 b. 先発投手から先制のホームランを打った。

(14a)は[時間軸上の起点]と[因果関係の起点]の間で揺

れがあり、[因果関係の起点]としての解釈が優勢であろうと思われるが、例えば「太郎は、いつから、あんなふうになったんだろう」という問いに対する回答として[時間の起点]とも解釈できる。(14b)も、「打つ」という事象によって「ホームラン」が生じるという点で[発生の起点]と解釈できるが、物理的なボールの位置変化と解釈すれば[位置変化の起点]と解釈できるし、さもなければ[エネルギー伝達の起点]とも解釈できる点で、曖昧になる。こうした曖昧さは、事態に対する話者の解釈に“揺らぎ”が生じうるために発生するものであって、それぞれの意味役割が概念規定として曖昧なのではない。この点は特に記して強調しておきたい。

以上、本節では、奪格NPに設定した6つの意味のうち6つを個別に特徴づけるとともに、現実の文脈においては言語使用者の解釈によって“揺らぎ”があり得ることを確認した。

### 3. 奪格の遠隔性

第3節では、奪格に固有の意味素性として〈遠隔性〉があることを示す。ここで言う〈遠隔性〉とは、結論を先取りして言えば、〈自動詞構造において、奪格NPと主格NPとの間に遠隔性が成立する〉および〈他動詞構造において、奪格NPは対格NPとの間に遠隔性が成立する〉ことをいう。

まず、[位置変化の起点]の場合、〈遠隔性〉は次のような例によって明確に例証できる。

- (15) a. 音楽隊が競技場から行進した。  
 b. 音楽隊が競技場で行進した。  
 c. 音楽隊が競技場を行進した。

(15)の例は、自動詞構造をなしており、場所の「競技場」と主格NP「音楽隊」の関係をみると、(15a)のように「競技場」がカラ格で標示されるときは、「行進」することで「音楽隊」が空間的に「競技場」と離れることが含意される。このことは(15b)と(15c)で弁別的であり、(15b)のようにデ格で標示した場合や、(15c)のようにヲ格で標示した場合には「音楽隊」の「行進」は「競技場」の内で行われ、したがって「音楽隊」が空間的に「競技場」と遊離するという解釈は生じない。このように、奪格NPが自動詞構造の主格NPや他動詞構造の対格NPと離れた状態にある性質を、本稿では〈遠隔性(remoteness)〉と呼ぶことにしたい。ここでいう〈遠隔性〉とは、空間的に離れているという性質だけでなく、同定関係にないこと(状態が異なること)や、2つの事態が時間的に離れていることなどを含む広い概念である。<sup>[6]</sup>

2番目の[状態変化の起点]の場合も、状態変化の前後に主格NPあるいは対格NPとの間に遠隔性が認められる。

次のペアにおいて、産物「石油」と材料「原油」が範疇として離れているとき、(16a)のように「原油」はカラ格で標示され、(16b)のようにデ格で標示することはできなくなる。

- (16) a. 原油から石油を精製する。  
b. ? 原油で石油を精製する。

この文脈で「原油」を通常デ格でマークできないのは、一般に「石油」が「原油」と別の物質として扱われるからこそ両者に異なる名称が与えられているからであって、範疇において「原油」と「石油」が離れているためと説明される。

逆に、産物と材料が範疇的に遠隔性がないとき、[状態変化の起点]は、(17a)のようにカラ格で標示することはできず、(17b)のようにデ格で標示されなければならない。

- (17) a. ? 妹が毛糸からセーターを編んだ。  
b. 妹が毛糸でセーターを編んだ。

この例で、[状態変化の起点(材料)]の「毛糸」がデ格で標示されなければならないのは産物の「セーター」も物質的には所詮「毛糸」に過ぎず、この点で「セーター」は同時に「毛糸」でもあり得るものとして解釈されるためと言ってよい。

3番目の[エネルギー伝達の起点]にも同様のことが言える。次の(18)が示すように、他動詞構造において奪格NPと対格NPとの関係に〈遠隔性〉が認められる。

- (18) a. 太郎が隣の部屋からロボットを操作した。  
b. 太郎が隣の部屋でロボットを操作した。

(18a)のように、「隣の部屋」をカラ格で標示したとき、対格の「ロボット」は「隣の部屋」にあるとは解釈できず、一義的に「ロボット」は「隣の部屋」以外のところにあると解釈されるのに対し、(18b)のように「隣の部屋」をデ格で標示したとき、対格NPの「ロボット」は「隣の部屋」にあるとも「隣の部屋」以外のところにあるとも解釈できる。

ここで注意すべきは、第1節で触れた主格と奪格が交替するように見える現象についても、奪格の〈遠隔性〉という観点から成否を説明できる点である。次の2組のペアが示すように、主格NPをカラ格で標示することが出来るケースと出来ないケースがある。

- (19) a. 私たちから政治献金を要求したことはありません。  
b. 私たちが政治献金を要求したことはありません。

- (20) a. ?? 元恋人から太郎を殺した。  
b. 元恋人が太郎を殺した。

(19)のペアで「私たち」を奪格で標示できるのは《はじまりの局面》において「私たち」と「政治献金」が離れていても「要求」することが可能だからであるのに対して、(20)で「元恋人」を奪格で標示できないのは、およそ「XがYを殺す」という言語表現が成立するためには、XとYとの接触が不可欠であり、XとYの遊離を保証するようなカラ格標示が不適切になるためと理解できる。

4番目の[発生の起点]にも、限定的ながら、次のような形で〈遠隔性〉が反映される。

- (21) a. 車のトランクから遺体が発見された。  
b. ?? 車のトランクで遺体が発見された。

このような奪格を[発生の起点]と分析するのは、主格の「遺体」に位置変化や状態変化が生じていないからであるが、奪格の「トランク」と主格の「遺体」の関係を考えるとき、視線の移動によって、結果的に、主格の「遺体」と「トランク」の間に〈遠隔性〉が含意される。

逆に、場所と主格NPの「遺体」の間に〈遠隔性〉が認められないとき、次のペアが示すように、カラ格での標示が不自然になる。

- (22) a. ? ルソン島から戦死者の遺体が発見された。  
b. ルソン島で戦死者の遺体が発見された。

(22)の文脈において、「戦死者の遺体」を、そのまま島の外に持ち出すということは経験的に起こりにくく、その分だけ(22a)の容認度は低くなる。つまり、(21)と(22)の対照から、[発生の起点]においても、主格NPとの間に〈遠隔性〉が認められることが確認されると思われる。<sup>[7]</sup>ただ、4番目の[発生の起点]の場合に「限定的」と断ったのは、[発生の起点]において〈遠隔性〉が認められないケースがあるからである。第2節で挙げた(11c)や(11d)の例について言うと、(11c)では「選抜する」ことによって、結果的に「候補者」は「応募者」と差別化され、この点で〈遠隔性〉が認められるものの、(11d)のようなケースでは、「立候補する」ことによって、「東京1区」から離れることはなく、この点で、[発生の起点]には部分的に〈遠隔性〉の例外が認められる。

5番目の[因果関係の起点]は、時間的な〈遠隔性〉が認められ、次の例において、[因果関係の起点]のNPが時間的に離れた関係にあるとき、(23a)のようにカラ格だ

けが容認度において適格であり、(23b)のようにデ格では容認度が低くなる。

- (23) a. 3 塁手のエラーから阪神が 5 点を失った。  
b. ? 3 塁手のエラーで阪神が 5 点を失った。

このとき「3 塁手のエラー」が(23a)のようにカラ格でなければならないのは、野球という競技において、「3 塁手のエラー」という単一のプレーだけで一気に「5 点」という結果は発生せず、経験的に「3 塁手のエラー」は失点が「5 点」に至る《はじまりの局面》でしかない。言い換えれば、「3 塁手のエラー」は「5 点」という結果と直接的に結びついておらず、その意味において「3 塁手のエラー」と「5 点」の間に〈遠隔性〉を認めることが出来るというのが本稿の分析である。逆に、(23b)のように下線部をデ格で標示できないのは、菅井(1997)で詳説したように、デ格は、事象を通じて変化を被らないという弁別的な性質があり、「5 点」という失点の中で「3 塁手のエラー」が“変化を被らない”という関わり方をしていないことに帰着される。

これに対し、次の例が示すように、[因果関係の起点]のNPが主格NPと離脱するとの解釈が困難になるときカラ格での標示は容認不可能となる。

- (24) a. ?? 花子が再び癌から倒れた。  
b. 花子が再び癌で倒れた。

このとき、(24a)が容認不可能になるのは、「癌」が「花子」に直接的に影響するものであって、時間的な乖離を含意するカラ格の意味と矛盾するからであり、「倒れる」という事象を通して変化を被らないデ格で標示しなければならないことになる。

最後の[時間軸上の起点]においても、時間の経過と共に、最初の時点と時間的に離れるのは必然であるから、例えば、「会議が午後 1 時から始まった」のような発話でも、「会議」の進行に伴って「午後 1 時」と離れるのは自明であろう。

以上、第 3 節では、カラ格に〈遠隔性〉とも言うべき性質が認められることを例証した。<sup>[8]</sup>

#### 4. 順序の起点

第 4 節では、第 1 節の(1g)に挙げた[順序の起点]について、文法的な性格と位置づけを明らかにする。

具体的に、[順序の起点]は、次のようなものである。

- (25) a. 入場行進で、選手たちが北海道代表から入場する。  
b. 公判では判決文が主文から読み上げられた。

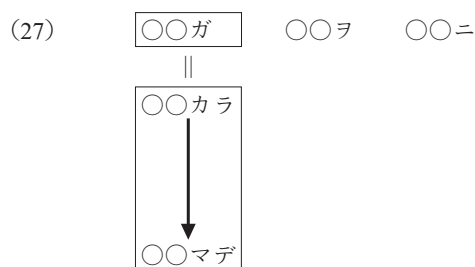
この例における奪格NPは、第 1 節で挙げた諸用法とは質的に異なる。(25a)において、カラ格で標示された「北海道代表」は、「入場する」という移動動詞によって表される事象の[位置変化の起点]ではない。むしろ、(25a)の「北海道代表」は主格NP「選手たち」の構成要素と分析できる。このとき重要なのは、(25a)が描く当該の事象において、「北海道代表」は、「選手たち」の中で、最初に「入場する」メンバーであるという点であり、(25a)の奪格NP「北海道代表」が「入場する」という事象の《はじまりの局面》をプロファイルする点である。この点で、[順序の起点]においても、奪格の基本的な性質が保持されていることを確認しておきたい。同様に、(26b)の「主文」は、主格NP「判決文」の一部(構成要素)であり、「読み上げる」という事象において《はじまりの局面》をプロファイルしている。

このように、(25)の奪格を[順序の起点]と特徴づけるとき、その対極は、次の(26)が示すように、マデ格で標示される。

- (26) a. 入場行進で、選手たちは北海道代表から大阪代表まで入場した。  
b. 公判では判決文が主文から量刑まで読み上げられた。

(26a)の「入場行進」で、「選手たち」を入場順に並べたとき、「大阪代表」と発話時点における最後の代表を指しており、少なくとも、発話時点においては、《はじまりの局面》にあるのが奪格NPの「北海道代表」で、《終わりの局面》にあるのが終格(マデ格)NPの「大阪代表」ということになる。<sup>[9]</sup> 同様に、(26b)の「量刑」は、主格NP「判決文」の一部(構成要素)であって、当該の発話の時点においては「主文」の中の《終わりの局面》にあたる。

こうした分析に基づいて、(26)のようなカラ格とマデ格の呼応関係を視覚的に表わすと、次の(27)のようになる。



(27)の図式は、ガ格NPに内部的な構成要素があって、その構成要素を順番に並べたとき、カラ格やマデ格は、それぞれ、順列における《はじまりの局面》と《終わりの

局面》をプロファイルするという関係を表すものである。

ここで分析したようなカラ格について、第1節で挙げた(2)や(3)のスキーマとの関係で説明すると、いわば、(3)において横(水平)の方向に設定されていた関係が縦(鉛直)の方向に回転したような形になっている。視覚的には次のように図示できる。



(28 a)



(28 b)

(28a)のような統合関係のスキーマが回転することで、(28b)のように、カラ格やマデ格が、それぞれ、[順序の起点]と[順序の終点]を示すようになる。スキーマが、基本的な内部構造を保持したまま回転や変形(伸縮)される性質を Herskovits(1986)は「耐久性(tolerance)」と呼んだが、これに倣えば、(25)のカラ格は、耐久性によって、横(水平)の関係が縦(鉛直)の関係に変容されるような形になったものと説明することができる。<sup>[10]</sup>

なお、「シャボン玉とんだ、屋根までとんだ」においてマデ格の「屋根」は統合関係にあり、[順序の終点]ではない。これを[順序の終点]と解釈するとき「屋根が飛んだ」という解釈が生じるのであって、本理論で説明可能な現象になる。

同様の現象は、対格にも観察される。

- (29) a. 職人は人形を頭の部分から作った。  
b. 太郎は原書を第2章から翻訳した。

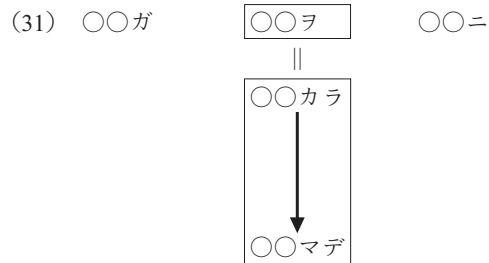
(29a)において、奪格NPの「頭の部分」は、「作る」という事象によって別のものに変化するわけではないので、[状態変化の起点]ではない。明らかに、「頭の部分」は対格NP「人形」の一部(構成要素)であり、「作る」という事象において対格NP「人形」の《はじまりの局面》をプロファイルしているというのが本稿の分析である。同様に、(29b)の「第2章」は、「原書」の一部(構成要素)であって、「作る」という事象における「原書」の中の

《はじまりの局面》をプロファイルしているということになる。

このように、奪格(カラ格)や終格(マデ格)が対格NPの一部(構成要素)をプロファイルするときも、カラ格の対極は、次の(30)が示すように、マデ格で標示される。

- (30) a. 職人は人形を頭の部分から胴体まで作った。  
b. 太郎は原書を第2章から第5章まで翻訳した。

(30a)の「胴体」は、「人形を作る」という事象において発話時点での《終わりの局面》をプロファイルしており、(30b)の終格NP「第5章」も、「翻訳する」という事象において対格NP「原書」の《終わりの局面》をプロファイルしていると分析される。この関係は、次のように図示できる。



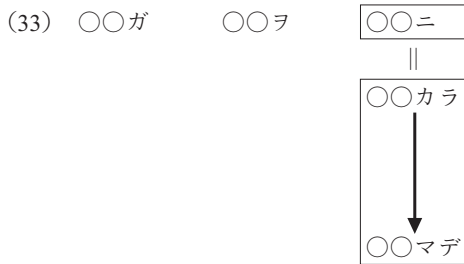
(31)の図式は、ヲ格に内部的な構成要素があって、その構成要素を順番に並べたとき、カラ格やマデ格は、それぞれ、順列における《はじまりの局面》と《終わりの局面》をプロファイルするという関係を表すものである。<sup>[11]</sup>

同様のことは、ニ格にも言える。

- (32) a. 担任の先生がクラスの生徒に出席番号1番から電話をかけた。  
b. 担任の先生がクラスの生徒に出席番号40番まで電話をかけた。

(32a)において、奪格NPの「出席番号1番」は、「電話をかける」という事象によって別のものに変化するわけではないので、[状態変化の起点]ではなく、明らかに、「クラスの生徒」の一部(構成要素)であり、「電話をかける」という事象において与格NP「クラスの生徒」の《はじまりの局面》をプロファイルしていると分析される。(32b)では、「出席番号40番」がマデ格で標示されているが、当該の発話時点において「クラスの生徒」の《終わりの局面》をプロファイルしているということになる。この関係は、次のように図示できる。





(33)の図式は、ニ格に内部的な構成要素があって、その構成要素を順番に並べたとき、カラ格やマデ格が、それぞれ、順列における《はじまりの局面》と《終わりの局面》をプロファイルするという関係を表すものである。

本節で挙げた現象は、カラ格の用法として特別なものではなく、第1節で示した(3)のスキーマを柔軟に変容することによって得られる副次的な意味であり、この点で、カラ格は、すべての用法にわたり、(2)や(3)のスキーマによって一元的に規定されることが確認されたと思われる。

## 5. 結語

本稿は、現代日本語の助詞「から」に関する記述研究として、意味用法を簡潔に整理するとともに、意味的な観点から弁別的な特徴を明らかにした。本稿で議論した内容は次のように要約される。

- [i] カラ格の意味用法は、[位置変化の起点][状態変化の起点][エネルギー伝達の起点][発生の起点][因果関係の起点][時間軸上の起点]の6つに整理されるが、<起点-着点スキーマ>あるいは<起点-終点スキーマ>によって一元化され、形態格としては《はじまりの局面》をプロファイルするものとして特徴づけられる。
- [ii] 自動詞構造においては主格名詞と<遠隔性>を示し、他動詞構造においては対格名詞と<遠隔性>を示す。
- [iii] <起点-終点スキーマ>に耐久性という概念を援用することで、[順序の起点]を一元的に説明することが出来る。

以上により、奪格(カラ格)の基本的特性と全体の構成が把握されたと思われる。他の格と弁別的に特徴づける具体的な作業は、別稿で提示することとしたい。

## 注

- [1] 鳥取方言などで発話される「更衣室から着替える(更衣室で着替エル)」のような用法は、本稿では考察の対象外とする。
- [2] ヲ格とニ格が、それぞれ、《過程》と《着点》をプロ

ファイルするという点については、「山を登る/山に登る」のようなペアで例証できるが、詳細については菅井(2005)の第5節を参照されたい。

- [3] 格の意味を2項的に特徴づけるという手法は、具格(デ格)について菅井(1997)で実践され、与格(ニ格)について菅井(2000, 2001)で実践した。
- [4] (10d)のように、仁田(1980:214-232)や張(1995)で取り上げられている主格と奪格の交替現象については、別稿において詳細に検討を加えることとしたい。
- [5] (13a)のような表現が同義反復にならないことについては、菅井・八木(2003)を参照されたい。
- [6] 砂川(1984)も、カラ格に“距離”という特質を指摘しているが、本稿ほど包括的に分析されていない。
- [7] もちろん、例えば、「押し入れの奥から/で祖母の着物を見つけた」のように、「見つけた」という事象の結果、場所の「押し入れの奥」に置かれたままになるという解釈と、外に持ち運ばれるという解釈の両方が可能であれば、カラ格とデ格の両方が可能になる。
- [8] カラ格は「家から出る/家を出る」のように[起点]のヲ格と交替し、「友人から本を借りる/友人に本を借りる」のようにニ格とも交替するが、前者については菅井(2003)、後者については菅井(2001)を参照されたい。
- [9] もちろん、都道府県別の全国大会であれば、経験的に「沖縄代表」が最後の入場チームということになるが、(26b)が発話された時点で入場行進は途中の段階であり、その時点で「大阪代表」が《終わりの局面》にあるという分析は間違いではない。
- [10] Herskovits(1986)のtoleranceという概念に対して、邦訳書では「許容」という訳語をあてているが、本稿では、田中(1991)にならって「耐久性」と訳しておきたい。
- [11] 類例に「(芸能人の記者会見で)今のお気持ちからお聞かせ下さい」「(政治家の演説で)地方から日本を変える」などがあり、前者では「今のお気持ち」に次いで「経緯」や「今後の動き」を聞こうとしており、後者では「地方」の次に「中央政府」を変え、結果的に「日本」全体を変えることが含意される。

## 参考文献

井佐原均・池田尚志・石崎俊

- 1989 「助詞『から』の意味分類と判定法」『情報処理学会第38回全国大会講演論文集』1, pp.279-280.

国立国語研究所

- 1997 『日本語における表層格と深層格の対応関係(国立国語研究所報告113)』三

- 省堂.
- 城田 俊 1993 「文法格と副詞格」仁田義雄(編)『日本語の格をめぐる』(くろしお出版), pp.67-94.
- 菅井三実 1997 「格助詞『で』の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集』127(文学43), pp.23-40.
- 菅井三実 2000 「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第20巻・第2分冊, pp.13-24.
- 菅井三実 2001 「現代日本語の『ニ格』に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』第21巻・第2分冊, pp.13-23.
- 菅井三実 2003 「空間における文法格『を』の意味分析」田島毓堂・丹羽一彌編(編)『日本語論究VII・語彙と文法と』和泉書院, pp.475-499.
- 菅井三実 2005 「格の体系的意味分析と分節機能」山梨正明・辻幸夫・西村義樹・坪井栄治郎(編)『認知言語学論考 No.4』(ひつじ書房), pp.95-131.
- 菅井三実・八木健太郎  
2003 「変化動詞における時間的局面的換喩現象」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻・第2分冊, pp.1-8.
- 砂川有里子 1984 「『ニ』と『カラ』の使い分けと動詞の意味構造について」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研究留学生別科)第12号, pp.71-86.
- 田中茂範 1991 「overの多義性とコア・スキーマ」『英語青年』第137巻・第6号(1991年9月号), p.291.
- 張 麟声 1995 「ガとカラー能動文動作主マーカー(普通名詞句の場合)」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版, pp.43-52.
- 仁田義雄 1980 『語彙論的統語論』明治書院.
- 朴 海煥 1996 「形容詞文における助詞」『と・から・で』の用法』『早稲田大学 国文学研究』第119号, pp.81-91.
- 森田良行 1989 『基礎日本語辞典』角川書店.
- Herskovits, A. 1986 *Language and Spatial Cognition: An inter-disciplinary study of the prepositions in English*. Cambridge: New York. Cambridge University Press. (堂下修司・西田豊明・山田篤[共訳] 1991『空間認知と言語理解』オーム社)
- Johnson, M. 1987 *The Body in the Mind*. Chicago and London: The University of Chicago Press. (菅野盾樹・中村雅之訳[1991]『心のなかの身体——想像力へのパラダイム転換』紀伊國屋書店.)
- Langacker, R. 1986 "Abstract Motion," *Proceedings of the Twelfth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp.455-471.
- Langacker, R. 1987 *Foundations of Cognitive Grammar* Vol.1. Stanford: Stanford University Press.